

教育母神と無能少年

万策尽きた男

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そこそこ昔にポツカ村に住み着いた地母神バアルは幼い少年を村の者の協力を得て15の歳まで育てた。バアルと少年カルム・ハヴノットは出稼ぎと新生活を求めて迷宮都市オラリオへ赴く。※バルという名のただの世話好き教育ママです。容易くシリアルスプレークします。

目

次

プロローグ：バアル・ファミリア
一話：ファーストアタック

4 1

プロローグ：バアル・ファミリア

「神様、そろそろ着くそうだぞ」

「予定よりも早くてよかつたですね」

神様と呼ばれた女性は艶のある碧の髪を揺らしながら外を眺める。

「オラリオはすげえ都会だつて話だ。わくわくするなあ」

「リンドウはポツカ村からほとんど出たことはないのでたいていの街は都会に映るでしょう。まあオラリオは少しばかり特別ですが」

オラリオは迷宮都市と呼ばれている。

冒険者達は日夜ダンジョンを探索し、モンスターがドロップする魔石や希少アイテムなどで生計を立てている。

冒険者とはギルドに登録されている神の恩恵を得た者たちのことである。

ダンジョンへ探索に行くためには神の恩恵が必要不可欠。なので神の恩恵を得ていらない者は冒険者になることすらできない。

「お二人さん、オラリオに到着しましたよ」

「おお、おおお！」

「ヽヽに来るのも久しぶりですね」

迷宮都市オラリオへ新たなファミリアが参戦した瞬間である。

「ここが私達のホームです」

「でけえ家だなあ」

「当然です。これから私達のファミリアへ加入する方がいるかもしれませんし、それにあの子たちがもう少し大きくなつたらオラリオに来たいと言う可能性もありますしね」

木造2階建てのファミリアホーム。村の小さな家に住んでいた彼らにとってはとても大きく見えている。

「ほら、入りますよ」

早速中へ入ると誰もいなしわりに小奇麗に片付いていた。恐らくこの建物を紹介した業者が手を入れたのだろう。

基本的な生活に必要なものは最低限揃つており、それほど困ることはなさそうである。

「ホームの確認が終わつたらギルドへ行くので寝たりしないでくださいね？」

「わかつてるつて神様」

この男、分かつたふりをしているだけである。ベッドに寝つ転がつて半分寝かかつてしているところだ。

神は笑顔のままサツと近づき……

「いい！」

男の腹部へ手刀を入れた。あざなどはできないものの、鳩尾に入れ抜けつこう痛い。ましてや油断していて無防備な状態では防ぎようもない。

「行きますよ」

「はい！」

場所は変わつてギルドの中。

「本日はどのような用件ででしょうか」

「今日はファミリアの登録とこの子の冒険者登録をしに参りました」

「はい。では登録しますのでこの用紙の項目に記入をお願いします」

神はすらすらと綺麗な字で記入する。それを見た受付の女性は「……綺麗」と感嘆の声を上げていた。

「バアル・ファミリア、所属する冒険者の名前はカルム・ハヴノットさんですね」

「はい、それで合っています」

一通りの手続きが済むとダンジョンの概要、講習がある。これは冒険者へ向けた生き延びるためのものなので聞いたほうがいいのだが、これを面倒くさがつて聞かない冒険者は多い。

しかし、彼が所属するのはバアル・ファミリアである。繰り返そう。バアル・ファミリアである。

彼が15の歳になるまで育て上げる真面目さ、母なる善性を与えて続けて穏やかかつ他者を思いやることができるように教育した帳本人。バアルがこの講習を受けさせないはずがないのだ。

「面倒だから受けなくとも「受けなさい」……はい」

神以外の親という側面は子に対して圧倒的なまでに優位性を持つ。彼に拒否権など最初から無いのである。

数時間に及ぶ講習が終わるとカルムはげつそりとした顔でギルドを後にした。彼の話によると受付の女性はとても楽しそうに講習をしていたという。

一話：ファーストアタック

「ここがダンジョンの1層か。もう少し暗いと思つてたけど結構明るいなあ」

オラリオへ来た翌日。

カルムはかねてから用意していた関節と胴のみを守るプロテクターと合金でできた手甲を装備して早速ダンジョンアタックを仕掛けたわけである。

ぶらぶら歩いていると壁から殻を破るような音とともにモンスターが現れる。

「お！ こいつらはコボルトか！」

襲い来るコボルト3匹。

冷静に構え、意識を戦闘へ傾け研ぎ澄ます。これは遊びではないと自らを暗示にかけてコボルトの予備動作をよく見る。

「ふつ！ はつ！」

「ガア？」「グア！」「ギ——」

それぞれ顎、膝、項を突き、回し蹴り、手刀で撃ち抜く。

人型のモンスターであるほどこれらはよく効くはずだ。

「うつそだろお前ら……頑丈過ぎない？」

「「「グルルルウ」」

「正拳突きイ！」

1匹に向けて突きを放つ。しかし、残り2匹がその隙を見逃さない。

「ぐおおい いってええ……！」

両脇腹を拳でサンドイッチ。これは地味ながらも結構痛い。

痛みを堪えて低く構えて足払いからの踵落とし。

「せえや！」

1匹の頭を碎かれて霧散する。残りは2匹だ。

「へへっ、結構強えじやねえか」

頬を伝う汗を脱ぎながら口角を上げる。

「いつも行かせてもらうぜ！」

右腕を脱力させつつ後ろへ引き絞る。横からの殴打を左手首を柔軟に使つて払い、正面からの殴打も紙一重で頬を掠る。

そして首元目掛けて拳を打ち出す。

ヒットする直前まで力のほとんどは抜いたまま。

(ヽヽヽだー！)

接触するギリギリで拳を思いきり握り込む。

——ヒット

重く鈍い衝撃がコボルトの全身を駆け巡る。

痛みを認識したのも束の間、意識を刈り取られて絶命。

「残りはお前だけだ」

最初は最弱クラスのモンスターだと油断していた。村の周辺にいたモンスターは容易く狩ることができたのである。ダンジョンでもそれは変わらないのだろうと高をくくっていたのは完全な間違いであつたと再認識させられた。

「ガア！」

よく見て、疾く払い、即打ち込む。この一連の動作は肉体に刻み込まれた反射に近い。

手甲に刻まれた無数の傷が鈍く輝く。

「ふんっ！」

コボルトの顔面へめり込む拳。

骨をも碎く打撃はその一切の暴力を顔面のみに注いだ。

頭部から地面に打ち付けられて弾むコボルトの五体は微動だにせず、そう時間もかからず霧散。最後に小さな魔石を残すのみであった。

「油断するな。冷静に思考しろ。そして冒険者は冒険をしてはいけない」

昨日講習をしてくれた受付の女性、エレナ・クレオーレの言葉を反

復する。

「やつと身体があつたまつて頭が冷えてきたところだ」

とん、と軽く跳ねながら全身の凝りをほぐす。

「どんとこいモンスター共よお！」

壁から次々と現れるコボルトたち。

そこからはカルムの独壇場。

脱力から放たれる殴打、蹴りはレベル1といえども1層のモンスターが受ければ一撃死は免れない。

神の恩恵を授かっていない頃から鍛え抜かれた五体は成長期途中と相まって徐々にその力を増していく。オラリオの外とは比較にならないほどのモンスターたちを相手に戦いの中で急成長する鋭敏な感覚を無くさないとばかりに2層、3層へと下りていく。

瞬間、何かが頬を掠る。

切れた頬から流れる血を拭いながら奇襲を仕掛けてきたモンスターと相対する。

「お前は……ウォーシャドウ」

疾い。

ウォーシャドウはすかさず鋭い爪で再度襲う。

「くつ、重い！」

一撃を手甲で受け止めるも凄まじい膂力に押され、膝をつく。

左腕ですぐに振り下ろされている敵の腕を殴りつけて仕切り直す。

「ふうー」

息を整えて思考を巡らせる。

(幸い敵は1体。正面突破のみの攻めができる)

ウォーシャドウは馬鹿正直に正面から突撃を仕掛ける。

「すうー」

一拍遅らせてこちらも突撃。敵の爪が届かないギリギリになるよう静止。静止した際の反動を利用して両腕を後ろへ引き絞り——放つ。

ウォーシャドウの顔面を両拳で挟み込んで潰す。

さらに拳をねじつて追い打ちをかける。

ウォーシャドウの動きが止まる。

「！」

一度痙攣した後、ウォーシャドウは霧散した。

「……ハア……ハア、危なかつた」

これで倒しきれてなかつたら手痛い反撃を食らつていたであろうことは想像に難くない。

今回は運が良かつた。それだけである。

「さすがに疲れちまつたよ。今日のところはさつさと帰るか」

カルム・ハヴノット。彼は神に育てられただけのただの村人である。

バル・ファミリア暫定団長カルム・ハヴノットの冒険はまだ始まつたばかりだ。